

平成26年12月30日(火)

老球の細道96号

老コーチのつぶやき

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

まだ教員であった頃のある日の1年生男子体育授業時、面白い光景を思い出した。テニスの授業である。ランニングしながらラケットでボールリフティングしてテニスコートを1周する練習であった。練習のスタートを自由にさせたら、誰一人として先頭切ってプレーする者がいなかった。それぞれが周りの様子を見ながら、誰かがスタートしたら、その後にはスタートしようという姿が見え見えだった。

すぐに注意を与えた。そしたら一人の生徒がスタートした。案の定、その後を金魚の糞のように動き出した。今度は最後にはなりたくないと思えて、ごちゃごちゃと固まった状態で走り出した。日頃運動部で活動している生徒達がたくさんいるのに、上手にできないことなど気にせず、先頭を切ってプレーする生徒が皆無であったことに言葉を失った。

現役コーチだった頃いつも思っていた。私が日々指導しているバスケット部員達はどうだろう。体育授業のみならず、色々な場面で失敗を恐れず、他人の眼など気にせず積極的に行動しているのだろうか。バスケットの勇者が24時間勇者であるだろうか。

ジュニアの時代は世界のトップランクにありながら大人になると世界で通用しなくなる日本人スポーツ選手への警鐘の本がある。その本の一節に次のようなことが書いてある。
【近年、中高生からプロ選手まで、日本の若いサッカー選手がゴール前の決定機で思い切りよくシュートせず、パスばかり回しているという姿が気になります。シュートはサッカーのプレーのハイライトであり、シュートを巡る攻防はサッカーの最もエキサイティングな場面の一つです。それでも、選手達は、よほどの好機でないかぎりパスに徹し、自らシュートするプレーを決断しようとはしません。シュートという重要な仕事は人に預けて、自分はパスすることで「お膳立ての役割だけはきちんとこなした」とでも言いたげなプレーです。私には、それは矢面に立つリスクを含んだ行動を取るより、逃げ道のある安全な方法を選択するという意識の表れに思えてなりません】

・・・永井洋一著『賢いスポーツ少年を育てる』（大修館書店）・・・

サッカーのところを、そっくりバスケットボールに置き換えても十分に考えさせられる内容だ。そもそもスポーツとは不確実な場面が連続する行為である。その不確実な結果を前にして、次にどんなプレーをするかプレーヤー自身が判断、選択しなければならない。したがって、状況判断から自己決定という個としての自立性が強く求められる。だから、スポーツを通して決断力、挑戦の意欲、勇気といった要素が本来伸ばされていくはずである。バスケットボールプレーヤーもしかり。

人はリスクを避けて無難にうまくいくことばかり繰り返していても、こじんまりとまとまるだけである。さらに難しいこと、レベルの高いことにチャレンジして挫折し、それを乗り越えていかなければ大きな飛躍は期待できない。

私たち指導者は、バスケットボールを通じて周りの目を気にしながら行動する風見鶏的な人間を育ててはいけない。バスケットボールを通じて、困難に自ら立ち向かい、自ら決断できる人間を育てなければならない。人間としての器の大きさがプレーヤーとしての大きさに比例すると信じている。